



大岡政談

全

昭和十年六月十日印刷
昭和十年六月十四日發行

有朋堂文庫
大岡政談
(非賣品)

東京市淀橋區西大久保町二丁目二百三十六番地

塚本哲三

東京市神田區錦町一丁目七番地ノ一

株式會社有朋堂

代表者

三浦正

東京市神田區錦町三丁目廿二番地ノ二

合資會社有朋印刷社

東京市神田區錦町一丁目七番地ノ一

株式會社有朋堂

不許複製

緒言

一代の名法官大岡越前守忠相の政談中、最も人口に膾炙せるもの、及び事件の内容多趣多様にして變化に富めるもの七編を萃め、加ふるに斷篇的小話十九篇を以てし、題して「大岡政談」といふ。世に大岡政談として行はるゝ話篇、元より甚だ多く、本書の收むる所は殆んど其五の一に過ぎずと雖も、特に意を其選擇に用ひたれば、亦以て全豹を窺ふに足らんか。

大岡忠相、初字を求馬と稱し、後市十郎又忠右衛門と更む。元祿四年父忠眞の後を繼ぎ、書院番、使番、目附等を経て正徳二年山田の奉行となり、從五位下に叙せられ能登守と稱す。其任に赴くや、延滞せる幾多の訟獄を斷じ、夙に名法官としての技倆を現はせり。後將軍吉宗馭世の初めに當り、召されて普請奉行となり、明年町奉行に轉任し、改めて越前守と稱す。彼が明達流るゝが如き裁斷と、煦々溢るゝが如き仁政とは、この時に於いて遺憾なく發揮せられたりしなり。彼や資性端嚴にして些の私曲なく、智量亦遠く衆に超え、事に臨みて奇才頓智の滾々湧出するものあり。魚目燕石の往々玉を欺くものありと雖も、彼の明鏡は遂に必

ず事件の真相を照破し、邪を破り正を顯さずんば止まず。徳川三百年の久しき、寔に空前にして絶後の名法官たりし也。

本書の文章は、蓋し徳川時代舌耕者流中文字ありし者の所作たりしなるべく、文としての價值は二流乃至三流の者に屬し、其内容亦史實の典據とすべからざるや論なし。然れども之を徳川時代の世相史として見、又これを實錄小説として見る時は、趣味津津々卷を掩ふを知らざるの概なくんばあらず。

本書の原文は専ら寫本として世に行はれ、絶對の典據と認むべき原本あるを見ず。今本書を校訂するに當りては、明治十六年榮泉社刊行する所の今古實錄本に基づき、比較的善良と認むる數種の寫本を校讐して、その宜しきに従ふに努めたり。其他一般の校訂方針は他の本文庫本と同じ。本書の校訂と校正とは主として椿強祐氏を煩はしたり。記して謝意を表す。

大正三年九月

校訂者 塚 本 哲 三

大岡政談 目錄

天一坊實記

上卷

- 吉宗公御誕生の事並加納將監
養ひ奉る事……………一
- 徳太郎君御不行跡の事並澤の
井懷妊に付御墨付を下さるゝ
事……………六
- 信房卿御高運の事並大岡忠左
衛門立身の事……………三
- 原田兵助金瓶を掘出す事並同
人薄命玉之助誕生の事……………七
- お三婆寶澤に物語る事並寶澤
薬店にて毒薬を盗む事……………二三
- 寶澤お三婆を縊殺す事並感應

院を毒殺の事……………七

○山伏由來の事並寶澤紀州出立
九州へ下る事……………三

○寶澤熊本に赴く事並餅屋を欺
きて奉公の事……………三七

○寶澤吉兵衛と改名の事並金子
を掠取り熊本を退去の事……………四三

○天神丸難船吉兵衛豫州藤ヶ原
へ上陸の事並同人赤川大膳が
隠家へ止宿の事……………四八

○赤川大膳素姓の事並同人神奈
川にて旅婦を殺す事……………五三

○吉兵衛災難に臨み大膳の事並
赤川藤井吉兵衛へ一味の事……………五八

中 卷

○赤川大膳後難を恐れて數人の
手下を毒殺の事並常樂院大膳

密計天一外二人を殺害の事	六
○惡徒等大望發起の事並山内伊賀亮天一坊へ始めて見參の事	七
○伊賀亮明察一味の事並信州濃州武州にて用金を集むる事	六
○美濃國にて家來を召抱へる事並常樂院旅館用意として大坂へ赴く事	四
○天一坊大坂表へ出張の事並御城代より天一坊を請待の事	九
○御城代天一坊へ對面身分尋の事並伊賀亮返答の事	九
○大坂御城代より早飛脚江戸御役人中御評議の事	九
○天一坊京都へ赴き諸司代へ對面の事並江戸高輪旅館造營の事	一〇〇
○天一坊關東下向酒井雅樂頭殿	

途中出會の事並八山へ著伊豆守殿御役宅にて諸役人へ對面の事	一〇五
○伊賀亮諸役人へ返答の事並越前守殿再吟味願ひの事	一一
○越前守再吟味直願ひの事並同人閉門の事	一六
○越前守死人の體にて閉門を破る事並同人密に小石川御館へ至らるゝ事	二三
○山野邊主税之助器量の事並御屋形御登城越前守へ再吟味仰付けらるゝ事	二六
下 卷	
○平石次右衛門戸村次右衛門問答の事並山内伊賀亮次右衛門へ對面の事	一三

○越前守殿御役宅へ天一坊来る事竝與力同心無禮を働く事	一三七
○大岡越前守殿伊賀亮の名を咎むる事竝伊賀亮大言即答の事	一四二
○越前守殿伊賀亮と網代問答の事竝天一坊八山へ歸る事	一四八
○越前守殿病氣届自身探索の事竝平石吉田の兩士紀州へ出立の事	一五三
○平石次右衛門吉田三五郎苦心調の事竝澤の井墓詮議の事	一五八
○平澤村平野村調へ行届く事竝兩士見知人同道歸府の事	一六四
○伊豆守殿より越前守殿へ使者附越前守殿覺悟の事竝次右衛門三五郎歸著越前守殿病氣全快届の事	一七二
○伊豆守殿越前守殿同道にて登	

越後傳吉之傳

上 卷

城の事竝小石川御館へ參らるる事	一七六
○網條卿御明祭の事竝越前守殿天一坊召捕方手配の事	一八二
○天一坊竝一味の者召捕らるる事竝一同御仕置落著の事	一八八
○傳吉孝行の事竝伯母お早に巡り逢ふ事	一九七
○傳吉江戸へ奉公に出づる事竝櫛を拾ふ事	二〇三
○傳吉柏原にて破屋へ泊る事竝孝子の物語を聞く事	二〇六
○傳吉お專が心を感じる事	二〇九
○傳吉江戸吉原三浦屋方へ奉公	

に住込む事……………三二

○傳吉自分の金を出して客人の
忿を宥める事……………二四

○傳吉暇を取り金を持ちて故郷
へ歸る事……………二七

○傳吉道中にて惡漢に出逢ひ難
儀の事竝騙子と同道旅行の事……………二九

○旅籠屋の下女働きにて騙子を
捕ふる事竝傳吉賊難を遁れ故
郷へ歸る事……………三三

○傳吉我家へ歸り證據の品紛失
の事竝金子を騙取らるゝ事……………三八

○傳吉酒宴を設け村中の人を饗
應す事竝お專騙を見顯す事……………三三

○お專騙の本人を顯す事お早お
梅上臺の家へ赴く事……………三四

○村の人々取持にて傳吉お專夫

婦となる事……………二四〇

○傳吉お專與惣次方へ引移る事
竝憑司村役召放さるゝ事……………二四三

○上臺憑司奸計の事竝傳吉無實
の罪を請ける事……………二四九

○傳吉無實の罪にて拷問に懸る
事……………二五四

下 卷

○お專與惣次牢内にて傳吉に逢
ふ事竝掛茶屋にて旅人の話を
聞く事……………二六一

○酒井讃岐守殿中仙道通行せら
るゝ事竝與惣次お專訴訟の事……………二六三

○訴訟人相手方江戸表へ御呼出
しの事竝上臺憑司夫婦一應吟
味の事……………二六七

○大岡殿傳吉及び同人妻專其外の者共呼出しの事竝一通り吟味の事……………二七三

○榊原家役人及び訴訟人相手方評定所へ御呼出の事……………二七六

○大岡殿猶又吟味の事竝憑司お早等が悪事の緒口見出さるゝ事……………二八〇

○細川越中守殿家來井戸源次郎呼出さるゝ事竝三浦屋四郎左衛門呼出しの事……………二八六

○大岡殿林大學頭殿と談話の事竝占ひ者判斷物語の事……………二九三

○一同の者又々評定所へ召出さるゝ事竝憑司お早等追々吟味詰の事……………三〇〇

○昌次郎夫婦江戸表へ出で本郷

に住居の事竝憑司親子惡事露顯の事……………三〇五

○一件落著御仕置の事竝傳吉一家繁榮の事……………三二二

村井長庵之記

上卷

○岩井村百姓作藏勘當の事竝作藏江戸小川町にて奉公の事……………三二五

○十兵衛娘文を身賣の事竝長庵惡計の事……………三三四

○札の辻人殺の事竝品川歸り難儀の事……………三三九

○札の辻檢使の事竝町奉行所へ長庵呼出の事……………三四四

○道十郎牢死の事竝長庵欺いて

お富を賣る事	三三八
○三次お安を欺く事並中田圃にてお安を殺す事	三五三
○伊勢屋五兵衛吝嗇の事並千太郎伊勢屋の養子となる事	三五八
○千太郎吉原へ赴く事並小夜衣千太郎へ戀情の事	三六二
○村井長庵度々無心の事並長庵金子五拾兩騙取る事	三六六
○村井長庵千太郎を打擲の事並千太郎覺悟を極むる事	三七二
○久八忠義異見の事並久八千太郎が難を救ふ事	三七六
○番頭久八忠義いとまの事並千太郎久八へ書面を渡す事	三七九
○六右衛門久八をいたはる事並	
久八紙屑買と成る事	三八五
○道之助孝心の事並瀬戸物屋忠兵衛お光道之助に巡逢ふ事	三八七
○忠兵衛長庵が始末物語の事並お光述懐の事	三九〇
○お光家主長助を頼む事並長助義氣公事好の事	三九三
下 卷	
○長助お光の兩人忠兵衛の宅へ到る事並大岡越前守殿へ訴訟の事	三九八
○大岡越前守殿吟味の事並村井長庵召捕の事	四〇二
○村井長庵白洲にて問答の事並長庵入牢申付けらるゝ事	四〇六

○長庵忠兵衛富三人對決の事並 長庵糺問の事……………	四〇九
○早乘三次吟味の事並三次と長 庵決對の事……………	四一五
○伊勢屋千太郎再度吉原へ通ふ 事並久八再々異見の事……………	四一八
○久八過つて千太郎を殺す事並 久八駈込訴に及ぶ事……………	四二二
○越前守殿久八取調の事並六右 衛門呼出の事……………	四二五
○一同惣呼出の事並長庵吟味の 事……………	四二九
○越前守殿小夜衣に尋問の事並 ……………	四三一
○越前守殿小夜衣に尋問の事並 ……………	四三一
○越前守殿小夜衣に尋問の事並 八逐一申止の事……………	四三五

○往古譬の事並青砥左衛門尉藤 綱の事……………	四三七
○村井長庵惡言の事並同人彌白 狀の事……………	四三九
○京都丸山料理人吉兵衛の事並 女房お久病死の事……………	四四二
○吉兵衛難儀の事並三州藤川驛 捨子の事……………	四四四
○捨子人情の事並久左衛門捨子 を養ふ事……………	四四六
○六右衛門申立の事并甲州屋吉 兵衛久八が助命願の事……………	四四九
○吉兵衛再應久八が助命願の事 並越前守殿吉兵衛に尋問の事……………	四五二
○吉兵衛逐一申立の事並越前守 殿仁慈裁判の事……………	四五四

○越前守殿仁慈勘考の事並五兵衛へ尋問の事……………四五六

○久八助命口書の事並善惡應報車輪の事……………四七七

○一同御所刑の事並おみつ道之助善報の事……………四五九

○久八が忠義顯るゝ事並丁山小夜衣尼となる事……………四六七

小間物屋彦兵衛之傳

○一同御所刑の事並おみつ道之……………四七一

○一同御所刑の事並おみつ道之……………四七三

○一同御所刑の事並おみつ道之……………四七八

○一同御所刑の事並おみつ道之……………四八〇

○一同御所刑の事並おみつ道之……………四八二

○一同御所刑の事並おみつ道之……………四八六

○彦兵衛御所刑になる事……………四八八

○惡黨勘太郎が事……………四九一

○彦兵衛伴彦三郎江戸へ赴く事……………四九三

○彦三郎父の骨を尋ねる事……………四九五

○駕籠舁權三助十證人となる事……………四九六

○家主八右衛門計略出訴の事……………五〇〇

○彦兵衛子息彦三郎吟味の事……………五〇四

○惡黨勘太郎召捕らるゝ事……………五〇六

○勘太郎吟味の事並彦三郎突合の事……………五一〇

○死活裁許の事……………五二二

○大岡忠相殿仁心の事……………五一五

白子屋阿熊之記

○金屋利兵衛井筒茂兵衛が事並

兩人の子供言名付の事……………五一九

雲切仁左衛門之記

- 大岡殿盜賊吟味の事並僧雲源盜賊の罪を自ら名乗る事……………五三八
- 白子屋庄三郎の事並女房お常娘お熊の事……………五三七
- 加賀屋長兵衛實意の事並大岡殿裁許白子屋一件落著の事……………五四六
- 白子屋一件裁許申渡の事……………五五五
- 原澤村百姓文右衛門親子の事並常盤屋の遊女お時身請の事……………五五九
- 甲州萬澤御關所破りの事並雲切小猿向ふ見ずの三人惡心の事……………五六三
- 雲切仁左衛門偽役人の事並原……………五六九
- 雲切仁左衛門偽役人の事並原……………五七一

煙草屋喜八之記

- 三吉雲切仁左衛門の方へ無心に行く事並仁左衛門小猿の兩人三吉を欺き殺す事……………五七九
- 雲切仁左衛門肥前の小猿御所刑の事並原澤村一件落著の事……………五八四
- 穀物屋の伴吉之助江戸へ出づる事並煙草屋喜八の事……………五八九
- 火附盜賊人違の事並家主平兵衛實意の事……………五九五
- 喜八妻お梅駈込訴の事……………六〇一
- 盜賊田子の伊兵衛自訴の事並煙草屋喜八一件落著の事……………六〇八

大岡裁判小話

麻布谷町人殺の事並大岡殿

名智の事	六二五
石地藏吟味の事並木綿取返	
裁判の事	六三三
佛市兵衛鬼源藏の事並佛と	
鬼と間違の事並道理を分	
けて理解の事	六三九
疊屋建具屋出入の事並一兩	
損裁許の事	六三八
江口屋の抱梶枕探しの事並	
藥店の手代忠三訴訟の事	
並詮議落著の事	六四三
飛鳥山花盗人の事並大岡殿	
並詮議落著の事	六五〇
並詮議落著の事並大岡殿	
並詮議落著の事	六五四
大岡殿 並詮議落著の事	六五五
幽靈裁許の事	六五八
越前守殿頼智裁許の事	六六二
題目念佛改宗の事並同裁許	
落著の事	六六四
荻生惣右衛門博學の事並野	
田文藏算術の事	六六八
大岡殿頼智の事	六七〇
腕の長吉無法の事並裁許の	
事	六七二
大岡殿即智狂歌の事	六七四
實母繼母の御詮議の事	六七五
密夫詮議の事	六七六
下總不動院願の事	六七八
盜賊人違裁許の事	六七九

大岡政談

天一坊實記 上卷

○吉宗公御誕生の事 並加納將監養ひ奉る事

抑下野國日光山に鎮座まします東照大權現より、第八代目の將軍有徳院吉宗公と稱し奉るは、東照神君の御十一男にて、紀伊大納言從二位光貞卿の御三男に渡らせ給ふ。紀伊名草郡寅伏山竹垣の和歌山の城主にて、御高は五十五萬石なり。大納言光貞卿には御男子三方ましく、御長男は綱教卿とて從三位中納言なり。此御二男は妾腹にて渡らせ給ふ。御三男御幼名徳太郎君信房と稱し、後に吉宗公と御諱改まりて、八代將軍にて天下の武將と仰ぎ奉りしは此君なり。扱此御母君と申すは九條前關白太政大臣の第四の姫君にて、お高の方の御腹にて御本腹なり。

評に曰く、難じて曰く、假令御三家方にても、御簾中様は江戸に御座なされ候筈なり、紀州表にての御誕生なるに、御本腹なりとは心得難し。是は當年大納言光貞卿、御國にて紀州和歌山にて御大病に渡らせ給ひければ、此時に御簾中様より公儀へ、此度大納言様御大病に付御國元へ入らせられ、御直に御看病遊はされたきよし度々御願にて、御老若御評定のうへ、先例には御座なく候へ共、格別の御家柄の事ゆゑに御聞濟に相成り、即刻御簾中様御國許へ登らせられ、晝夜とも御側にて御看病遊はし候處、追々御平癒に相成り、其後御懷妊なる故に、和歌山にて御誕生ありしなり。

扱御簾中様ある夜の夢に、日輪月輪を兩手に握るとの夢を見給ひけるが、是より御懷妊の氣ざしあり、常ならぬ御身とはなり給ふ。

評に曰く、夢は五臓のわづらひと昔より世俗にいひ傳へ侍れども、夢も正夢にして、賢人聖人或は名僧知識、または碩學等の人を産み給ふ事は、天竺唐土我朝ともにその例少からず。已に立契法師は夢を四つにわけたり、一に現夢、二に虚夢、三に靈夢、四に心夢なり。現夢とはうつゝ幻の如く見ゆるをいふ。虚夢とは心魂の勞よりして種々様々の事を夢に見るをいふ。靈夢とは神靈佛菩薩の冥助にて御告をかうむるをいふ。心夢とは常平生こ